
夏の楽しみ

二天

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夏の楽しみ

【Nコード】

N7174M

【作者名】

二天

【あらすじ】

夏と言えば「あつい」

そこで「あつい」をテーマにして物語を作ってみました。

青春ものです。

じつとしてても汗が出る。

それは冷汗や脂汗ではない、まさしく夏の汗。ヤバイねー。

夏のさらさらとした塩水がじつとしてても体中から吹き出るから困ったもんだ。どうせ同じなら、外で友達と思いつきり遊んだほうがいいに決まってる。(家は貧乏なもんで、クーラーなんて寝るとき以外には点けないんだ)だから俺は午後に親友のダイスケと遊ぶ約束をした。

どんな事をして遊ぶかって?・・・そんなことはまだわからない。遊びに計画なんて、低脳な俺たちには出来ない技術だからな。

。。
ヤバイ、汗が止まんねえ。ダイスケ、早く来ないかなあ。。。。

「あの・・・・・・・・ダイスケですけど・・・・・・・・」

この気温のせいか、鈍く聞こえるピンポン。その後に俺が受話器を取って返事をする。ダイスケの声。なんだか照れたような喋り方はおそらくここが人の家だからだろう。いくら友達の家とはいえ、ピンポンを押すとなんだか照れるんだよね。

俺はやっと来たかと胸を弾ませて、

「今行くねー!!」

と答えた。ダイスケはいつもの調子で(照れていない)早くこーイ!!と俺を急かす。

「ダイスケ、外暑い？」

「当たり前だろ！！体が溶けちまうよ」

「ふーん、まあ後20ツ分位したら外出るわ」

「勘弁してくれー！！」

「嘘嘘、今行くねー」

体が溶けちまう。ダイスケの言葉は間違っていないかもしれない。外に出ると熱風が一気に俺を包み込んでくる。ダイスケは、もう半分溶けかかっているように見えた。

ダイスケは首の部分の服を引っ張って顔を拭いている。しかしいくら拭いても顔はまったく乾いていない。

俺はそんなダイスケを見ながらマウンテンバイクを引っ張り出し、跨った。

「さて、今日は何して遊ぼうか？」

「俺あちー中うろろろするのは嫌だぜ、どっか建物の中で涼みたい」

「じゃああそこしかないじゃないか」

「だな」

あそこ、とは大きなショッピングセンターのこと、とはいえこ

は軽い都会だから単に大きいショッピングセンターといえばそこかしこにある。

今いるところ（俺の家）から一番近い所を指しているのだ。（思いの出の場所だとか、そういうロマンチックなものは俺らには無いのさ、下品だから）

「そうと決まれば早く行こうぜ、俺そろそろ倒れそう」

ダイスケがいかにも死にそうな顔をして言うので、急いでマウンテンバイクをこぎだした。

チャリをこいでいると、いくらか楽だった。右手ではタクシーやトラックなどの騒音物体がビュンビュン、こいつらが暑さを倍増させているのかと思ってしまっほどうるさい。

また左手にはスーツを着たカツコイイおじさんが、ハンカチで額を拭きながら先を急いでいた。カツコイイといったが、そういうおじさんがいっぱいいるので皆が皆同化してしまい、あまりカツコよく見えない。

後、他に見えるのは周り全体高いビル。何のビルだか分からないから俺とダイスケは、「きつと映画に出てくる悪党のアジトだぜ」なんて勝手に決め付けてたりする。それと、上を見るとモノレールの線路があった。このモノレールは銀色のボディの真ん中に青い線が引いてあった。カツコよく思うかもしれないが、実際はちょっとダサい……。

この街は全体影の色をしている。しかし全く涼しくない。寧ろ他の地域より暑いくらいだ。

この矛盾した街に俺やダイスケはよく15年も住んでられたな……なんて思っても誰も責めないだろう。逆に仲間が増えるんじゃないか。

「ダイスケー、あちい」

なんとなくダイスケに呟いてみる。右隣にいるダイスケは顔を真っ赤にさせて一生懸命にママチャリをこいでいた。真っ赤な顔が少し怖い……

「俺もあちいよ、頼むからその単語は使わないでくれー」

確かにその通りだと思う。暑いというと余計に暑く感じるのは気のせいではなかった。

「ごめん……まだつかねえのか」

「その単語もなし！！着かないって思うと腹が立って仕方がねえや」

やっぱりその通りだと思う。こつも暑いと怒りっぽくて仕方が無い。信号が赤だと俺の心は地獄の炎の色に変わるし、人が多くなつて前に進みにくくなると、それはもう……いけないちよつと腹が立ってしまった。

「早く行こつぜ」

「おう」

車が少なくなった代わりに、おじさんが多くなった。

数々の試練を乗り越えて、ようやく俺たちは極楽の世界へとたど

り着いた。建物全体が光り輝いているように思える。

「はやくおいでー」と優しい声が聞こえてくるような錯覚。もちろん俺もダイスケもそれに逆らわない。

長かった。暑い長い道のりの中、俺とダイスケは二人で手を取り合い、騒音だの人間ポールだの様々な試練を乗り越えたんだ。ついにその苦勞が報われる時がきたんだ。(大袈裟すぎるのも遊びの一貫)

さあダイスケ、ともに中へ入ろう。栄光への世界へ……横を見ると、ダイスケはいなかった。あいつ、友を置き去りに先へ行ったんだ。もう中へ入ろうとしている。俺は急いで追いかけた。

入り口の自動ドアが開く。

いったいこれはどういうことだろう。まるでこの世の風とは思えないような風が俺らを包む。

ひんやりと優しい風、ここは本当に地球なのか……

「ダイスケ、ここきてよかったな」

「おう、最高だよ」

俺とダイスケはしばらく自動ドアの前に突っ立っていた。

さて、俺たちの年代がショッピングセンターですることとは大抵限られている。ひとつはゲームコーナーで新しいゲームを指くわえて眺めてる。そしてもう一つは……

「あの子、どう思っっ？」

「おれびみよー」

「結構いいと思うけどな」

ダイスケと俺はゲームコーナーの脇のベンチに座り、前を通り過ぎる人たちをこっそりと眺めていた。

(どんな人たちは書かないでおこう)

腕を組む人、大きな鞆に逆にせおられているような髪の毛の長い人。その人たちを見て、俺たちは勝手に評価するのだった。

「あんな奴より絶対俺のほうがいいって」

「あはは……」

「お前もそう思うだろ？」

「うーんどうだろうな？」

先に話し始めるのは、大抵ダイスケのほうからだ。それはきっと、俺の性格が小心者で、ダイスケが限りなく大胆者だからだろう。だから俺はただダイスケの言葉を聞いているだけ……。

ダイスケはやっぱり、そんなことなど気にしないでしゃべり続ける。

「俺、あの人にコクつちゃおうかなあ」「あっち人ならたこ焼きうつは奢ってあげられる」「こつち向いてくんねえかなあ」……。

俺やっぱり適当に相槌を打つだけ。さっきまでいろいろと書いて

きたが……。やっぱりこれだけは苦手だな。第一知らない人に、よくもまあこう色んなことをダイスケは言えるものだ。感心しちまつよ……。

俺、だんだん置いていかれるような気がする。ダイスケに、十何年って一緒にいた親友のダイスケに……。

正直ダイスケがものすごく速いスピードで成長していくような気がするんだ。俺はただそれを眺めているだけ。

明日、ダイスケが大人になっていたらどうしよう、髭をカッコよく生やして、俺を見下したら……。

俺、ダイスケに見捨てられたらどうすりゃいいんだ？

俺、なに考えてるんだろ……。

友達と楽しく遊んでるつてのに、馬鹿馬鹿しい。

「なあ、そろそろ帰ろうぜ」

俺の頭の中にいきなりダイスケの声が入ってきた。本当にいきなりだった、どうやら自分の世界に入っていたみたいだ。

「もう評価はいいの？」

「おう！……なんだか詰まなくなってきた、他人のあつつあつなところ眺めてたって、全く面白くない」

意外だった。ダイスケの口からこのような言葉が出てくるなんて。ダイスケは今まで彼女なんていたことが無い。(俺もだけど)だからつらやましいつらやましい連呼して、いつも俺を道ずれに観察する。決して「つまらない」なんて言葉は言わなかったのに。

今日はいったいどうしたんだろう、脳みそが溶けちゃったのかな？

「ダイスケがそんなこと言うなんて、なんかあった？」

「おい！！それどういう意味だよ！！俺はただ単にお前と一緒に外で本物の『暑さ』を体感してたい、そう思ったただけだ」

「あつさ」に本物なんてあるのかどうかは別として、正直に嬉しかった。言葉を飾る必要なんて無い、嬉しかった。

俺とダイスケはゆっくりと立ち上がり、灼熱のドアへと向かっていった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7174m/>

夏の楽しみ

2010年10月15日08時46分発行